

ひらつか

子どものも の力を 信じて

「こんなに揺らせるようになったよー」
揺れたり回ったりする感覚遊具に乗った子どもが、
声を弾ませる。子どもは生まれつき環境に適応する
力を持っている。その力を伸ばすつが、感覚遊具だ。
ことも発達支援室くれよんでは、多くの専門ス
タッフが子どもたちを見守っている。



目次	1～5面… 特集 子どもらしく親らしく…日常生活に苦手を抱える子どもと、支える保護者や市の取り組みなどを紹介します。	平塚市の人口と世帯数 <平成27年5月1日現在()内は前月比>	◎発行 平塚市 ◎編集 秘書広報課 〒254-8686 神奈川県平塚市浅間町9番1号
	6～7面…募集・お知らせ「知って安心」「みんなの力」は休載します。	人 口 256,533人…(+93)	☎0463-23-1111 ㊚0463-23-9467
	8面…ヒラツカルチャー「博物館モノ語り」	世帯数 106,797世帯…(+285)	http://www.city.hiratsuka.kanagawa.jp/

●●●●● 広報ひらつかが届かない場合は、ミッド☎0120-350311(月～金曜日、午前9時30分～午後5時)にご連絡ください。●●●●●



トランポリンの上で跳ねる色とりどりのボールのように、子どもは元気いっぱい個性豊かだ。しかし落ち着きが無かったり、自分勝手だったり、集団生活が少し苦手な子どももいる。くれよんでは苦手を抱える子どもと、親や保育士らを支援している。子どもと親が自分らしく、生活できることを目指して。

☎ こども発達支援室くれよん ☎ 32-2738



「お友達に、おもちゃを返さない」「お友達をたたかないで」公園に行くと、常に叱っていた。子どもにありがちな行動だが、2歳の優希君は極端に多く、しかも衝動的であった。付き添う真衣子さんは、周りのお母さんに謝ってばかりだった。

友達の家に行っても精神的に疲れてしまう。いつも他人の目を気にしていた。毎日が苦痛で、子どもと向き合うのが負担になっていた。

子どもの自己主張が始まる『イヤイヤ期』は2歳ごろから、と育児の本にはあった。だが優希君の場合は、少し違う気がした。『育てにくさ』を感じるようになった。

言葉などの発達がほかの子どもと比べて遅いと感じることもあった。だが「男の子は発達が遅いって言うし」と自分に言い聞かせていた。「発達

私の心の支え

息子の優希君(仮名)が、すやすやと眠る。今日も長い一日が終わった、と内田真衣子さん(仮名)は大きく息をついた。

「もう少し詳しく診てもらえませんか？」

優希君の『育てにくさ』が気になり、保健センターで受けた3歳児健康診査で個別相談を申し出た。健診では異常がなかったが心配だったので、自分から個別相談を希望した。保健センターで開いていた親子のグループ活動に何度か参加し、その後、くれよんを紹介された。

くれよんに電話で予約をし、臨床心理士に発達全般の相談をした。初めのうちは月1回、徐々に回数を減らし、数カ月に1回のペースで相談していた。訓練では、言語聴覚士に優希君の言葉の使い方、作業療法士に体の使い方を見てもらっていた。

「くれよんは楽しいね。今日の先生は誰だろう？」

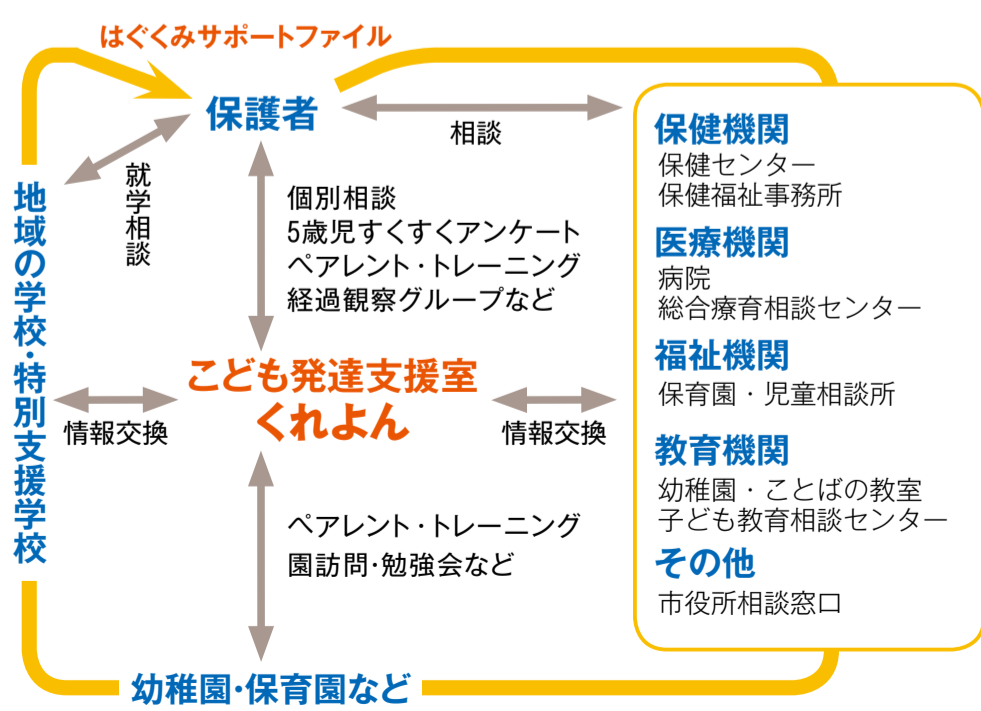
多くの専門スタッフに囲まれた優希君はいつも口にしてきた。くれよんに行く日は朝からご機嫌だった。

くれよんの提案で通い始めた民間の療育施設で、大きく成長した。療育は専門的な支援を組み合わせた保育だ。通い始めて10カ月ぐらいいから、優希君の変化を感じた。椅、

が遅くても、もうちょっと待とう」「いっばい声を掛けてみよう」と自分なりに納得して様子を見ていた。

一人っ子の優希君と2人きりで向かい合う毎日。「子育てって大変だな」と当たり前のことと受け止めていたが、限界は近づいていた。

くれよんSUPPORTS



こども発達支援室くれよん(追分1-43福祉事業センター内)では、子どもの「育てにくさ」などをきっかけとした発達の相談を受け付けている。支援の入口となる初回相談件数は、平成20年度の130件から26年度には270件となり、年々増えている。

子どもの様子を個別相談やグループ活動を通して理解し、さまざまな関係機関と連携して、子どもの成長を保護者と一緒に見守っている。

くれよんでは、子どもへの直接的な関わりのほかに、市内の幼稚園・保育園の先生との協力も進めている。それぞれの機関と連携を深め、子どもへの一貫した支援を目指している。

4月の勉強会には、保育士ら88人が参加した。くれよんの臨床心理士から「子どもの心の発達」の講義を受けた。



支援の輪をつなぐ
くれよん



▶「イチゴ」「トマト」と元気な声が響く。先生が持っているゴムの色から連想する食べ物子どもたちが素早く答える。

◀先生の話を聞いたり、手遊びをしたり、椅子に座りながらの活動が、くれよんで少しずつできるようになった。



子どもに長く座れるようになった。友達を意識した行動も少しずつできるようになった。真衣子さんも近くで見えないと不安だったのに、少し離れられるようになった。

家庭と保育園が連携

5歳になり、療育を週1回に減らし、優希君は保育園の年中クラスに通い始めた。

訪問で定期的に保育園を訪れ、優希君本人と周りの友達、訪問先の先生を支援してくれた。例えば、スムーズに園生活を送れるよう、優希君との接し方を、友達や先生にアドバイスしてくれた。

家庭と保育園で食事などの対応が違っていると、優希君が混乱する。支援計画を家庭と園が共有できるよう、くれよんが調整してくれた。

優希君は食感などで、食べられない食材が多かった。まず一口食べることから始めたり、食べられる量まで減らしたりした。食事の楽しさや、少ない量でも完食の喜びを感じるための配慮で、やがて食



「ニョキッニョキッ」手遊び歌「キャベツのなかから」を歌いながら指を曲げ伸ばし

べられる食材が少しずつ増えていった。

2年間の保育園生活では、全ての行事や活動に参加できた。友達との輪の中で生活できるよう、くれよんと保育園が環境を整えてくれた。優希君は、自分の状況に気付いていないだろう。

真衣子さんは連携の成果を大きく感じた。

向き合い方で変わる

自分の子どもの発達に疑問を感じると、すぐに病院で診察が必要と考える方もいるかもしれない。でも、病院では診断を受け、薬をもらうことはできても、育てにくさへの戸惑いやお母さんの気持ちには応えてはくれないこともある。大切なのは、「子どもとの向き合い方だ」と思う。

大皿でお菓子を出すと、優希君は独り占めしてしまう。小皿に分けるよう優希君に頼むと、自分が配れるから率先して配ってくれる。

また優希君は、伝えたいことをスムーズに話せない。一方、人の話を聞かずに、衝動的に話し始めることもある。

聞き手は話を遮らずに、待たなければならぬ。止めることは簡単だが、話を最後まで聞くという大人の手本をしっかりと見せるようにしている。周囲が少し工夫するだけで優希君は変わった。

一緒に成長した親子

優希君は4月から小学校に入学した。放課後はデイサービスに通う毎日だ。7歳になった今でも、真衣子さんの心配は絶えない。それでも少しずつ手を離して、自立を見守っている。

子育てや経済面で頼れる実家は、県外にある。当初は、平塚での生活に不安があり、実家の近くに引っ越すことも考えた。だが、子育てが大変だった時期に過ごした平塚で、多くのものを得た。

優希君を育てる悩みは、公園で知り合うお母さんに、ちよつと話さずらく、話しても理解されにくかった。くれよんを通して、たくさんのお母さんと知り合えた。今では、ママ友の枠を越えた、大切な友人ばかりだ。

また、くれよんのスタッフも多くの悩みを受け止めてくれた。いつも一緒に考え、道筋を見付けてくれた。一人つきりて子育てをしていた自分の気持ちに寄り添ってくれる心強い存在だった。

くれよんに出会ったから、平塚に暮らし続けたいと思うようになった。「くれよんは私の心の支えでした」

くれよんに相談するなら

気になることを、お気軽にご相談ください。

- ①落ち着きが無く集中して遊べない
- ②友達にあまり関心が無い
- ③名前を呼んでも振り向かない
- ④集団行動が苦手
- ⑤歩行など運動面や言葉の発達が心配など。

来所相談

月々金曜日の平日、午前10時～午後3時、1時間単位。電話で予約が必要です。相談当日は、子どもと保護者が一緒に来てください。子どもの様子を観察しながら、

保護者と話します。

相談は無料です。必要に応じて継続して相談を受け、関係機関やグループ指導などを紹介します。

電話の受け付け

月々金曜日の平日、午前8時30分～午後5時。相談中などは、電話に出られないことがあります。留守番電話に氏名・電話番号を入れてください。折り返しご連絡します。

☎ 0463-2738

市役所別館

江陽中学校

N4

市役所本館

中央公民館

勤労会館

福祉会館

平塚郵便局

子ども発達支援室

くれよん

ケース2

親も自分を取り戻す

私って、子育てができない親なのかな。息子の**大志君(仮名)**の育児に疲れ、**田村美紀さん(仮名)**は自己嫌悪に陥っていた。

買い物に行くと、大志君はどこかへ行ってしまふ。落ちて置いてご飯を食べられない。言葉も遅く、美紀さんの心配は尽きなかった。

2歳児健診のときに、『育てにくさ』を相談。幼稚園に入る3〜4カ月前から、くれよんを利用するようになった。

大志君は3歳児の療育グループで、集団生活のルールを学びながら、幼稚園生活に備えた。入園後は、年少クラスの中で落ち着いて座ることが徐々に身に付いていった。

くれよんでは、3カ月ごとに個別相談を受けていた。発音が不明瞭なことがあり、「ケーキ」の発音が「チエーチ」になっていた。言語聴覚士の指導や、自宅での発声練習などで、発音が改善した。

また、距離感をつかむなどの空間認識が苦手で、作業療法士と練習を続けている。階段の上り下りでは、手すりを必ず握るなど、大志君自身も苦手というのを本能的に感じていた。今は自然に手すりを使っている。見守るようアドバイスを受けている。

園訪問がきっかけに

大志君が何に困っているかは、見た目では分からない。周りの子どもと同じように

きると、幼稚園の先生には見えていた。

だが大志君は、教室で何かに気を取られて、立ち歩くことがあった。注意を受ければ座り、反省の姿勢も見せる。立ち歩く理由が、先生には分からなかった。

くれよんのスタッフが園訪問をした時に、先生に理由を説明してくれた。

「大志君は『椅子を片付けましよう』という先生の言葉をそのまま受け止め、友達の椅子も片付けに行っていました」

椅子を片付けたのは良い行動だ。「自分の椅子を片付けましよう」などと、大志君への声の掛け方を具体的に覚えてもらった。

園訪問の後、大志君は幼稚園の先生とさらに信頼関係を深めた。怒られることもあるが嫌いではないと考えられるようになり、園生活を楽しめるようになった。

PTAへの参加

ゴールデンウィークや夏休みなどの長期休暇中には、美紀さんは朝から晩まで育児に追われていた。「逃げ場が無い」との思いに襲われることさえあった。

専業主婦なので、一人っ子の**大志君**とはいつも一緒に過

ごす。夫は交代勤務の仕事に就いていて、生活リズムが昼夜逆転するときもある。夫の両親も仕事があり、手助けを頼みにくい。

くれよんでは幼稚園のママ友には相談できないような悩みを、同じ悩みを抱えるお母さん同士で共有できた。

「将来、何かにつまずいても、病院のカルテで過去を振り返れば、解決の糸口が見えるかもしれない」。先輩ママから、発達の記録を残すようアドバイスも受けた。くれよ

ケース3

褒めてステツプアップ

娘の**亜衣ちゃん(仮名)**を見つめる**宮川麻美さん(仮名)**は首をかしげる。「うちの子、周りのお友達とはちょっと違うかも」

ピアノの講師として多くの子どもを見てきた経験から、亜衣ちゃんに違和感を抱いていた。育児に大きな問題はなく、亜衣ちゃん自身も困っているように見えなかった。

しかし、漠然とした不安は募る一方だった。幼稚園に入園すると、できないことや気になることが、周りの友達と比べて浮き彫りになっていった。年少クラスの面談で相談したところ、くれよんを紹介された。

くれよんでは作業療法士と一緒に、体の使い方などの訓練をおよそ2カ月に1回受けていた。まだ問題点がはつき

んで、先輩ママと出会わなければ、病院の受診は考えもしなかった。注意欠陥多動性障害(ADHD)の傾向があるものの、明確な診断結果は得られなかった。

子育てに悩んだとき、くれよんで知り合ったママ友やスタッフが導いてくれた。子どもとの向き合い方も見直すことができた。親子関係も修復してくれる安心感があった。

子どものために通い始めたくれよんは、いつしか「親が自分自身を取り戻す場所」と感じるようになった。



遊具で遊びながら、体を刺激する

クラス替えで不安に

年中でクラス替えがあった。仲良しだった友達と離れた。先生も新しくなった。亜衣ちゃんは心が急に不安定になって、落ち着きがなくなってきた。友達とのトラブルも出てきた。亜衣ちゃんはじっくり考えてから話すタイプだ。言葉が出にくく、友達とコミュニケーションが上手にとれないことがあった。また、お母さんごっこやお店屋さんごっこなど、年少とは違う遊びが



先生の合図でゴムを上げ下げ

登場するようになった。周りの雰囲気から遊びのルールを理解できず、友達とうまくいかないこともあった。一方、自宅でも涙もろくなり、不安から「ギューって抱っこして」と言ったり、おしっこに失敗したりすることも増えた。

亜衣ちゃんの心が揺れたとき、麻美さんはどう向き合えばいいのか分からなくなってきた。集団生活を学ぶため、くれよんの経過観察グループ、

悩むママの応援隊

「子育てをしているお母さんを元気にしたい」と、こども発達支援室くれよんの和久井葉子室長は語る。

くれよんは、直接子どもに関わるだけではない。親に対して、ペアレント・トレーニング(ペアトレ)やサロン形式で悩みを相談できる、さらにサロンなどを開いている。困り事を抱える子どもを育てるのは、一筋縄でいかない場面が多い。「子育てに悩むお母さんに、自信を取り戻してもらいたいですね」と笑顔を見せる。

また、くれよんでは保護者からの相談に加え、市内の幼稚園や保育園の先生との連携も増えている。「目標は、くれよんに来なくても、身近な幼稚園や保育園で、苦手を抱える子どもの支援ができるようになること」と続ける。

保護者の応援ツール

「切れ目のない支援が何よりも大切です」と和久井室長は力を込める。はぐくみサポートファイルには、子どもの成長の様子や各種相談、支援の内容を、乳幼児期から記録する。入園や入学などの環境が変わる時期や、複数の支援機関を並行して利用している時期などに、家庭・学校・支援機関が、スムーズに情報を共有ができるようになる。成人になってからも、成長の過程を幼児期から一貫して知る必要がある。ファイルが継続的な支援の鍵となる。情報が必要になったときにファ



の方を合意する室長と和久井室長

イルを読み返すと、過去の苦手が分かり、支援の道が開ける場合もある。

ファイルはくれよんで配っており、中にとじる記録用紙は、市ウェブからダウンロードできる。くれよんでは、ファイルの使い方や活用方法などの講習会も開き、積極的な利用を呼び掛けている。

また、さまざまな相談窓口や福祉サービスの情報を「発達支援ハンドブック」にまとめ、3月に発行した。保護者や関係機関に配布しているほか、市ウェブからもダウンロードできる。

親を育てる。ペアトレ

4月に勤労会館で開いたペアトレの初日。和久井室長はホワイトボードに板書をしながら2時間の講義で、トレーニングの概要などを説明した。ペアトレは子どもを褒め、良い行動を促していく。くれよんでは平成24年度から導入している。

「小さな成功体験を大切にしながら、親子の信頼関係を高めましょう」と話す和久井室、



先輩ママの経験を生かす

「悩みに共感し、明るい未来を示したい」と平塚地区自閉症児・者親の会「平塚やまびこ会」の会長、小川浅美さんは笑顔を見せる。くれよんが開くきらきらサロンに、先輩ママとして同会の会員が参加する。きらきらサロンは、子どもの発達に不安がある保護者が、相談や意見交換ができる場だ。

就学や生活環境の変化などの不安を、経験を基にアドバイスしている。自分が大変だったときに、先輩ママに救われた。「今度は自分が、色んなお母さんの役に立てればいいな」と話す。

多くの方がきらきらサロンに参加するのを見て、「福祉サービスが充実しても、悩みを聞いてもらいたいというニーズは変わらないんだな」と続ける。福祉サービスが増え、さまざまな選択肢から選べるようになった。小川さんらが子育てに

奮闘していた、およそ15年前は、親の会だけが頼りだった。

顔が分かる安心感

現在は、月1回の情報交換会や公所にある西部福祉会館の福祉ショップの運営などが、活動の中心だ。福祉ショップは水曜日を除く平日、お昼を中心にカレーライスや手づくりケーキなどを、福祉会館の利用者に提供し好評だ。「子どもが将来、働くための実習の場でもあります」と小川さんは語る。

子どもが自立するにつれて、親同士が話す機会が少なくなる。それでも困り事が起きると、やまびこ会に助けられる。「先輩ママから話を聞き、将来の不安を解消できる親の会のありがたさを感じます」と言う。

やまびこ会は、県内で同じ悩みを抱える400世帯以上の家族とつながっている。ほかにも支援センターや弁護士など、子どものトラブルに協力して対応できる。

直接顔が見えるやりとりが一番の安心だ。「誰でも気軽に遊びに来れる場にしたいですね」と小川さんはほほ笑む。



写真左から、やまびこ会の小川浅美さん、堀由美子さん、菅沼恭子さん、雨宮恵子さん

☎ 平塚やまびこ会の小川 54-6830



「先生のお話、ちゃんと聞けたね」。できたことは、すぐに褒める



塗り絵は椅子に長く座る練習にもなる

4カ月間、2週間に1回のペースで参加した。経過観察グループは少人数の集団生活で、1回の活動は2時間。歌や手遊びなどを通して、子どもの様子を観察していく。親は子どものすぐ近くに居た

り、隣の部屋からマジックミラー越しに見たりした。経過観察グループで成功体験を積み重ね、できることが増えていった亜衣ちゃん。集団生活のルールを学びながら、良い行動ができたときには、先生が褒めてくれた。シャツの裾をズボンにしまうなど、身だしなみを褒められ、自宅でもできるようになった。

褒める子育てを実践

夫は仕事が忙しく、平日は亜衣ちゃんと妹、麻美さんの3人で過ごすことが多い。実家が近くにあり、育児が大変なときはサポートしてもらったこともある。実家の母に相談すると、「大きくなれば大丈夫よ」と励まされたが、素直に納得できず、一人で悶々と悩んでばかりいた。くれよんに行ってからは、親身にサポートしてくれるスタッフに出会えた。同じ悩みを抱え、共感し合ったママ友もできた。話を聞いてもらうだけで気持ちが軽くなった。麻美さん自身も変わった。気持ちを入れ替えて、亜衣ちゃんと接することができた。くれよんでの経験をまねて、自宅でも「褒める」を実践。亜衣ちゃんの成長を実感するともに、親子関係も考え直すきっかけになった。「親も一人じゃない」と強く感じた。

継続支援に期待

「くれよんには意欲的な先生が多く、子どもや親にとって魅力的な場所ではないでしょうか」と話すのは、相模原市中央区にある和泉短期大学の河合高鋭さん(左上写真)。同短大児童福祉学科で専任講師を務め、保育士や幼稚園教諭を目指す学生に、発達障がいのある子どもの保育方法などを教えている。自閉症・アスペルガー症候群・学習障がい・注意欠陥多動性障がいには、落ち着きの無さや、社会性の課題などがある。原因は先天的な脳の機能障がいだ。平成24年度の文部科学省の調査では、公立小・中学校の普通学級に通う児童・生徒の6・5割が、担任教員から見て学習面や行動面で著しい困難を抱えていた。小学校1年生に限れば、その割合は9・8割に上る。「問題行動が繰り返されると、障がいによるものではないかと考えるポイントです」と河合さんは指摘する。

「支援の現場を知るために、くれよんに助けってもらっています」と河合さん。福祉サービスの充実などで、子どもの困り事に周囲が早く気づき、適切な支援ができるようになった。「くれよんのはぐくみサポートファイル(4面下段などで、継続的な支援が期待されます」と力を込める。

少人数で学び、すぐに実践できる



はほほ笑む。

子どもの行動そのものを直すのではなく、好ましい行動・好ましくない行動・危険な行動の三つに分け、ロールプレイなどを通して対応方法を身に付ける。どんな場面でも、優しい言葉掛けができるよう、8回の連続講座で学んでいく。保護者だけでなく、市内の幼稚園や保育園の先生にも、ペアトレは広まっている。「園・学校・支援機関・家庭がペアトレで一つになって、子どもに手厚い支援をしていきたいですね」と、和久井室長

5歳児 すくすく アンケート

子どもの健やかな成長を支援し、就学をスムーズに迎えられるようにするためのアンケートです。市内幼稚園・保育園の年中クラスに在園または、4月2日～平成28年4月1日に5歳になる子どもで希望する方。

在園している方には6月下旬、園からアンケートを配ります。回答したアンケートは、園に提出してください。園からアンケートの配布が無かった方や園に在籍しておらず希望する方には、郵送します。くれよんに電話でご連絡ください。

アンケート結果や希望により、臨床心理士・言語聴覚士・作業療法士・保育士ら、くれよんの専門スタッフがサポートします。子どもが楽しく充実した生活を送れるよう、保護者や園の先生と一緒に考えていきます。

☎ こども発達支援室くれよん 32-2738